資料紹介

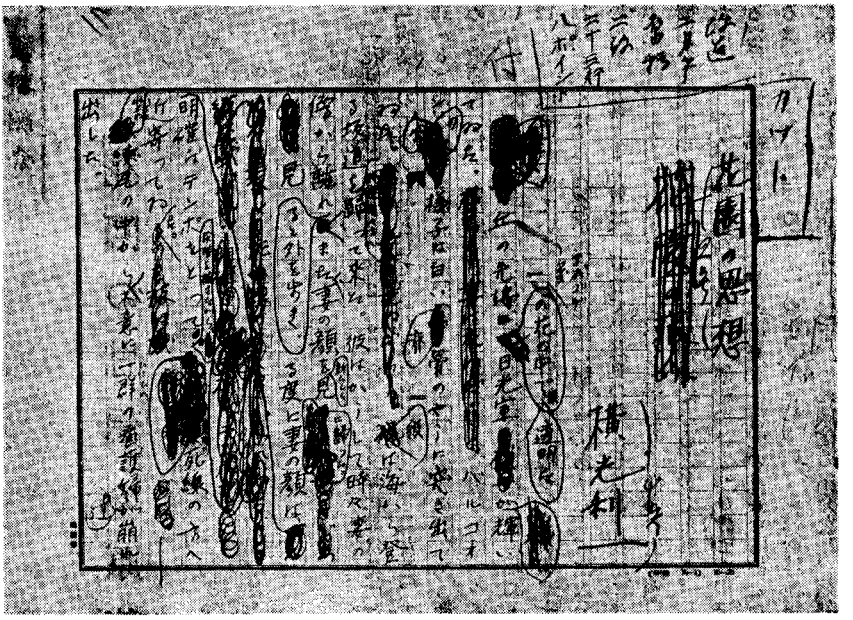
「花園の思想」の原稿

――紹介と翻刻――

十重田裕一

「花園の思想」(『改造』昭2・2)は、横光文学における所謂「病妻もの」のひとつとして、「春は馬車に乗つて」(『女性』大15・8)などとともに人口に膾炙し、横光利一研究においても極めて重要視されてきたが、原稿の所在はこれまで明らかになっていなかった。今回、その原稿が早稲田大学図書館に所蔵(昭33・12・9 収蔵)されていることが判明した。原稿の保存状態はそれほど悪くなく、題名が最初「花園の病人」であった点、主人公の改名(「梶」→「彼」)、章立ての変更の他、七百数十箇所に及ぶ削除部分もかなり復元することが可能であり、作品の生成過程、横光の表現意識を探るうえで貴重な資料になると考えられる。したがって、挿入、削除箇所を含めて、原稿のひとつひとつを出来るだけ正確に翻刻していくことが横光利一研究の重要な階梯となるはずである。「花園の思想」の生成過程についての検討は他稿に譲ることにして、本稿では、以下、この原稿の紹介をし、翻刻を行うことにする。

原稿用紙は「松屋製」「(SM印 A…1)10…20」で、ペン書き。総計四十二枚。ノンブル(横光による)は「41」までだが、八枚目に該当する原稿用紙の上部に「七枚目の續き」と付記されているものがあり、それを含めて四十二枚の計算になる(この四十二枚の原稿用紙総てに、「改造り印」と通し番号〈1〉〜〈42〉の印が押されている。なお、十五枚目に該当する原稿用紙には〈15〉の印の他、誤って打たれたと考えられるが、〈13〉の印も押されている。)。番号に関してはこの他、二枚目にはノンブルがなく、「33」「37」「38」が、それぞれ「32」「36」「37」と一度記載されて訂正されている。なお、〈14〉の十六〜十八行目(本稿86頁下段21行目〜87頁上段3行目上から二字)まで、貼付した原稿用紙の上に書き込まれており、十九行目以降の原稿用紙は切り取られている。〈17〉〈26〉も貼付されて、書き込まれた箇所をもつ(前者は本稿88頁



上段12行目〜16行目、後者は同92頁上段7行目〜12行目)。〈14〉〈17〉〈26〉とも、貼付される以前の稿を判読するのは不可能。〈1〉には「創作欄」「ルビ付」の指定が鉛筆で、また、「カット」「改造二月号原稿二段二十三行八ポイント」の指示、「花園の思想」に「2号」、「横光利一」に「4号」という割付が朱でなされている。なお、原稿全体を通じて、「八」「十」「十三」を除く各章番号にも「8ポゴチ」(「8ポゴ」)という指定がある。

「花園の思想」の初出は、『改造』の昭和二年二月号に掲載されたものであるが、原稿との間には若干の異同がみられる。これは、ゲラ刷段階における著者校正、編集者による送りがなの修正、植字段階での誤植などによるものと推察される。また、『新選横光利一集』(改造社、昭3・10)所収の際、結末部の削除(本稿99頁上段1行目、「――キーボ、」以下)の他、若干の改訂がなされた。『定本横光利一全集』第2巻(河出書房新社、昭56・8)には、このテクストに、編者(栗坪良樹)による誤字修正などの校訂が施されたものが収録されている。

本稿における翻刻は、原稿の成立過程、原稿と初出との異同が明らかとなるよう配慮した。以下、初出を底本とし、次に示す凡例に即しながら翻刻を行うことにする。

〔凡例〕

一、初出を底本としたが、原稿の様相を極力そのまま復元すべく、促音、異体字、誤字等は可能な限り原稿の表記にしたがった。旧字と新字の混用が見られるが、それも原稿のままとした。

一、初出は総ルビであるが、右の理由からルビについても原稿の

ままとした。
一、原稿段階における挿入は――、削除は（　）で示した。
一、初出段階における挿入は……、削除は〈　〉で示した。
一、修正箇所の対応表示可能なものは（・・）。。、〈・・〉。。で示した。
一、同一箇所に複数修正がある場合は、それを／で分かち、示した。
一、判読不可能な箇所は□で示した。
一、原稿用紙の終わりは」で示し、一枚の終わりにはアラビア数字でその枚数を付記した。

（花園の病人）
花園の思想

横光利一

一

（□色／遠く線の）丘の先端（に／で）の花の中で、透明な日光室（の硝子）が（海の（光）光りに）輝いてゐた。（恐らく、妻は死ぬだらう。）バルコオン（（に）へ登る）の梯子は白い（魚の）脊骨のやうに突き出てゐた。（恐らく妻は死ぬだらう。）（梶）彼は海から登る坂道を肺療院の方へ歸って來た。彼はかうして時々妻の傍から離れ（て）ると外を歩き、また、妻の顔を新〈ら〉しく見（るのが好きであった。／に歸（□□□）る）に歸った。見る度に妻の顔は、（だんだんと美しく死（□）線の方へ曳かれてゐるのを彼は感じた。明確なテン／明確なテンポで）明確なテンポをとって（、）段階を描きながら（美しく）、（鮮かに／靜に美しく）克明に死線の方へ近寄ってゐ（るのを彼は感じた。）た。――（錬）山上の練瓦の中から、不意に一群の看護婦達が崩れ出した。」1

「さやうなら。」
「さやうなら。」
「（御氣嫌良う。）さやうなら。」

退院者の後を追って、彼女達は（坂）陽に輝いた坂道を白いマントのやうに馳け（て來た。／降りた。）て來た。彼女達は薔薇の花壇の中（へ）を旋回すると、門の廣場（の）で（輪を造った。）一輪の花のやうな輪を造った。

「さやうなら。」
「さやうなら。」
「さやうなら。」

（一團の別離の聲）芝生の上では、日光浴をしてゐる白い新鮮な患者達が、坂に（繁）成った果實のやうに累累として横たはってゐた。（彼らは默っ（てゐた。）たまま（彼らは）口を開けて空氣を吸ふ魚のやうに（口を開けて／ぼんやりと）ただぼんやりとして空を見てゐた。）

（梶は妻の病室へ歸って來ると彼女の顔を見た。彼女の顔は、花瓣（の）に纏りついた空氣のやうに（水々しく絶えだえな艶かさを）沈んでゐた。）

（梶）彼は患者達（の幻想の空に描いた）の幻想の中を柔かく廊下へ來た。長い廊下に添った部屋（の）部屋の（硝子の中）窓から、絶望に（輝）光[2]った（冷い）一列の眼光（に覗かれながら妻の病室へ歸って來た。）が一つづつ）が冷たく（彼（の方へ投げられた。）に迫って來た。彼にはその眼が、一つづつ鋭い音を立てて身に刺るやうに（思はれた。）感じられた。彼に迫って來た。

〔「が一列に」と欄外に記入の後削除〕

彼は妻の病室のドアーを開けた。妻の顔は、花瓣に纏はりついた空氣のやうに（爽やか）、哀れな朗かさを（持）もつ）たたへて（ゐた。）靜まってゐた。

——恐らく、妻は死ぬだらう。

彼は（柩を覗くやうに、）妻の顔を寢臺の横から（柩を覗くやうに）透かしてみた。罪と罰とは何（物）もなかった。彼女は處女を彼に與へた（神秘な）滿足な結婚の夜の美しさを回想してゐるかのやうに、（端整な呼吸を恍惚とした）端整な青い線を（横／、）その〈横顔〉[3]顔横の上に浮べてゐた。

〔童番号の下、原稿用紙欄外に「一行アキ」の指示削除〕

（彼に）二、（二）

（彼（は）には（最早や）悲しみの時機が過ぎてゐた。彼は医者（と妻との間）から（、）、妻の宜告を幾度聞かされたか分らなかった。ただ今は、二人は二人を引き裂く死（について）の断面を見やうとして（互に）、互に顔を覗き合（っ）せてゐるだけにすぎなかった。（それは丁度、）丁度、二人の）

〔以下欄外記入〕

（その度に、彼は彼の力の及ぶ限り死と戰った。が、彼が戰へば戰ふほど、医者の宜告は事實と一緒に明克になっていった。彼は萎れて了った。彼は疲れて了った。彼は呆然として虚無（□に）の）」[3]

二

彼と妻との間には最早〈や〉悲しみの時機（が）は過ぎてゐた。彼は今迫（、）醫者から妻の死の宜告を幾度聞かされたか分らなかった。その度に（□／、）彼は醫者を變へてみた。彼は最後の努力で彼の力の及ぶ限り死と戰った。が、彼が戰へば戰ふほど、彼が醫者を變へれば變（□）へるほど、醫者の（□の）死の宜〈言〉告は事實と一緒に明克の度を（増し）加へた。彼は萎れて了った。彼は疲れて了った。彼は手を放したまま呆然（として虚無の）た（る藏のやうに（、）、虚無の中へ（浸）坐り（出した）込んだ。さうして、今は、二人は二人を引き裂く死の断面を見やうとして〈、〉ただ互に暗い顔を覗き合（っ）せてゐるだけ（にすぎなかった。）である。丁度、二人の眼と眼の間に死が現はれでもするかのやうに。（彼は默って）彼は（默って）食事の時刻が來ると（□）、黙って匙にスープを掬ひ、（妻は（黙々として／黙って）口を（開く）黙って）黙って妻の口の中へ流し込んだ。丁度、妻の腹の中に潜んでゐる死に食物を（飲ます）與へるやうに。

あるとき、彼は（妻に云った。）低い聲でそっと妻に訊ねてみた。」[4]

「お前は、死ぬのが、ちょっとも〈恐〉怖くはないのか（。）ね。」

「ええ。」と妻は答へた。
「お前は、」もう生きたいとは、ちよっとも思はないのかね。」
「あたし、死にたい。」
「(ふ)うむ。」と彼は(云っ)頷いた。
二人には二人の心が〈、〉硝子の両面から覗き合ってゐる顔のやうにはっきりと感じられた。

〔章番号の下、原稿用紙欄外に「アキ」の指示〕

三

(彼には)今は、(この)彼の妻(の身体(が)は(、)、)は、ただ(死を願って)生死の間(に)を轉ってゐる一疋の怪物(に)とより見えなかった。/であった。)だった。あの(彼を)激しい熱情をもって彼を愛した妻は、(もう)いつの間にか盡く彼の前から消え失(□)せて了ってゐ(た。/るのに彼は氣がついた。)た。(——)さうして、彼は?(彼はただ)あの激しい情熱をもって妻を愛した彼は、今は感情の(磨)擦り切れた一個の機械(に)となってゐるにすぎなかった。實際、此の〈二〉一人は、(その互に受け合った長い)その互に受け(合っ)た長い期間の苦痛のために、もう夫婦でもなければ(、)人間でもなかった。(□□)二人の眼と眼(の)を經だててゐる空間の距[ママ]離には、ただ(透明な)透明な空氣(が)だけが(透明)柔順に(□)伸縮してゐるだけ(にすぎなかった。/だ□□□た。)である。その二人の間の空氣は(「恐らく陽が輝けば)死が現はれ(るまで、恐)て妻の(身体)眼を奪ふまで、(□)恐らく陽が輝けば」5 明るくなり、陽が(没)没すれば暗くな(ってゐる)るに相違ない。二人にとって(が/)、時間は(ただ)最早〈や〉愛情では伸縮せず、(今は)ただ二人の眼と眼の(空/距[ママ]離を)空間に明暗を與へ(て色づける太陽の)る太陽の光線(に)の變化(に□□(□)覗て)となって、露骨に現はれてゐる(だけ)だけにすぎなかった。それは靜かな(虚無であった。)眞空のやうな虚無であった。彼には(もう妻の)横たはっ(彼には)てゐる妻の顔が、その傍の(寢臺の盆)藥臺(の上の糸[ママ])や盆の(線の)やうに(、)、一個の美事な靜物に見え始めた。

〔原稿用紙上部欄外に「改行」の指示〕

彼は二人の間の空間をかつての生き生きとした愛情のやうに美しくするために、花壇の中からマーガレット(を)や雛罌粟をとって來た。その(マ)白いマーガレットは(、)虚無の中で、ほのかに(、)妻の動かぬ表情(を)に笑〈み〉を與へた。(あの)また、「あの(眞赤)柔かな雛罌粟(は)が壺にさざ(ると)って(柔ぐ)微風に赤々と搖らめくと、妻はかすかな歎聲を洩して眺めてゐた。此の四角な部屋(の中)に竝べられた(、)壺や寢臺や壁や横顔や花々の靜まった靜物の線の中から、かすかな一條の歎聲が洩れるとは。彼は彼女のその歎聲の秘められたやうな美しさを聽くために、」6 (文[ママ])戸外(の花と云)から手に入る花と云ふ花を部屋の中へ(持って來た。)集め出した。

薔薇は朝毎に水に濡れたまま(届けられ)搖れて來た。紫陽花(は)と矢車草と(は紫の影を造って片隅の壁の上に投げてゐた。芍藥と(□)菊と(は)はグロテスクな厚みを(□)もって/野

茨の儚なげな白さ(は)とグロテスクな芍薬の厚みは)野茨と芍薬と、菊とカンナは絶えず三方の壁の上で咲いてゐた。それは(貧しい)華やかな花屋(のやうで)のやうな部屋であった。彼は夜毎に(此の花屋の中を足音を忍ばせて(□)こっ(そり)そり)(燭)燭臺に火を照け(て、もしかしたら)ると、もしかしたらこっそり此の青ざめた花屋の中へ(こっそりと/、)、死の客人が(彷れて)訪れてゐはし(な)まいかと(、黙って)妻の(顔)寝顔を覗き込んだ。

〔章番号の下、原稿用紙欄外に「アキ」の指示削除〕

(三)(四)

(彼は(眼)自分の疲れを慰めるために、彼の眼に觸れる空間の存在物を盡く美しく見やうと努力し始めた。それは彼の感情のなくなった虚無の(中□)空間へ打ち建て(ただ)つるべき、ただ一つの生活(となり出した。/であった。)として、「彼に殘されてゐ」7(た生活)るものであ(った。)る。)〔(た生活)以下文末まで、九枚目の最初部に記載されたもの〕

(或る夜、彼いつものやうに妻の寢(□)臺の傍へ忍び寄ると)すると、或る夜(、)不意に(彼女)妻は眼を開けて(怨めしげに)彼〈(に)を見ると、怨めしげに(一言)ひとこと〉に云った。

「あなた(は)、私が死んだら、幸福になるわね。」

彼は默って妻の顔を(見)眺めてゐ〈てから、〉た。そして、彼は自分の寢床へ歸って(來(た。)て)來〈て〉ると憂鬱に蠟燭の火を吹き消した。

(——多分、こんなに暗くなることだらうと)

四

彼は自分の疲れを慰めるために、彼の眼に觸れ(た存在物)る。空間の存在物を盡く美しく見やうと努力し始めた。それは彼の感情のなくなった虚無の空間へ打ち建てら(る)るべきただ一つの生活として、彼(□)に殘されてゐたものだった。」8

彼は彼の寢床を(愛し)好んだ。寢床は妻の寢室(の頭)と仝じであるとして(み)も(、/、)、「輕症者の靜臥すべきベランダ(である。/だ。/だった。)にあった。(その)ベランダは花園の方を向いてゐ(た。)た。彼は此の〈べ〉ベランダで夜中眼が醒める度に〈、〉妻より月に惱まされた。月は絶えず彼の鼻の上にぶらさが(って/ったまま)ったまま皎々として彼の(眼)視線を(ひきつけて)放さなかった。その海の(や)断面のやう(に)な月夜の(中で、芍藥)下で、(花)花園の花々は絶えず群生した蛾のやうに(□、白く)ほの白い圓陣を造ってゐた。さうして月(は)は、(□)その花〈々〉花の先端(に)の縮れた(雛を/青い)羊のやうな皺を(守り)眺めながら、「(海の方へ花園の上を)蒼然として海の方〈渡っていった(。)。

さう云ふ夜には、彼は(床)ベランダ(□/を)からぬけ出(て/ると)て夜の園丁のやうに花の中を歩き(正)廻った(。)。(遠く入江を包んだ岬は花園の横から眞直ぐに延ばした一本の手のやうに突き出てゐた。)(濕)濕った(サ)芝生(の)に抱かれた池の中で、一本の噴水が月光を散らし(ながら/て)ながら周

囲の石と花」[9]（々）とを濡らしてゐた。）とに戯れてゐた。それは穏〈や〉かに庭で育った高價な家畜のやう（な感情）な淑やかさをもってゐた。また遠く入江を包んだ二本の岬は（輝きながら）花園（の横）を抱いた黒い腕のやうに曲ってゐた。さうして、（海は）水平線は（遙かに）遙か一髪の光った毛のやう（な）に、（月）月に向って彫らみながら（、沈んでゐた。／花園）花壇の上（に）で浮（い／き上っ）いてゐた。（かう云ふとき、）かう云ふとき、彼は絶えず火を消して眠ってゐる（病舎の）暗い病舎の方を眺めるのが癖であった。彼の（見る病舎の中では、）頭の中には、（無數の病菌に食ひ破ぶられた）腐りかかった肺臓が花の中に轉ってゐる所が（浮（ぶ）んで來る。）黒い菌のやうに浮んで來る。）

かう云ふとき、彼は絶えず火を消して眠ってゐる病舎の方を振り返るのが癖であ（った。）る。すると彼の頭の中には、（腐りかかった黒い菌[4]のやうな）無數の肺臓が（無數に）、花の中（に轉がってゐる所が浮んで來た。）で腐りかかった黒い菌のやうに轉がってゐる所が浮んで來（た）る。恐らくその無數（[ママ]）の腐りかかった肺臓は、低い街々の陽のあたらぬ屋根裏や（石垣）塵埃溜や、それともまたは、「齒車の噛み合ふ機械（（の）の隙間から此の花園の中へ流れ集）や」[10]（器物の積み重なった）飲食店（や）の積み重なった器物の中へ、「胞子を無數に撒きながら、此の丘の花園の（上）中へ寄り集って來たものに相違ない。しかし、此（の）れらの憐れにも死に逝く肺臓（を）の穴を（[ママ]）防ぎとめ、再び生き生きと活動させて巷の中へ送り（返）出す（此の）ここの花園の院長は、もとは、彼の助けてゐるその無數の腐りかかった肺臓のやうに、（完全に）死を宜告された腐（り果てた）った（二つの）肺臓を持ってゐた（。／のだ）。一人の（肺□）傷ついた肺臓が、（その／その／その）自身の回復した喜びとして、（生涯）その回復期の續く限り、無數の傷ついた肺臓を助けて行く。これが、この花園の中で呼吸してゐる肺臓の（、）特種な運動の体系であった。

［章番号の下、原稿用紙欄外に「アキ」の指示］

（四）五

（この腐り行く數多[5]くの肺臓を貯へてゐる）ここの花園の中では、新鮮な空氣と日光と愛と（新鮮）豊富な食物と安眠とが最も必要とされてゐた。ここでは夜と雲とが現はれない限り、病舎（を）に影を投げかけるものは屋根だけだった。食物は（山と海と山との調味豊かな品々が時に（違）従っ」[11]て華やかな色彩で食慾を増進させ（、）た。空氣は晴れ渡った空と海と山（の）との三色の緑の（波）色素の中から湧き上った。（さうして愛は？）物音とては（靜（か）けさで耳が）しんしんと（痛（くな）る）む此（の）に耳の痛む靜けさと、時（々）には娯樂室から（聞えて來て）かすかに（聞えて來て）上る（月光曲）ミヌエットと、患者の咳と、花壇の中で花瓣の上に降りかかる忍びやかな噴水の音（と）ぐらひにすぎなかった。さうして、愛は？愛は都會の優

れた醫院から拔摘された看護婦達の清淨な白衣（の微笑の）の中に、五月の微風のやうに流れてゐた。（が、さて、）病人は何を考へてその日日を過してゐるのであらう。彼らは多分、彼らの肺に黴菌を植え付けられた街々の太った足や、擦れ違ふ電車の（横）腹（の）や泥水の中から、夫々愛するものの顏や姿（を）の幻影を感じ）

しかし、愛はいつの（場合）ときでも曲（物）[6]者であ（った）る。此の花園の中で（無）ただ無爲に空と海と花とを眺めながら、傍近く寄る（女性）ものが、もしも五月の微風のやうに爽かであった（とすれば）なら、そこに柔かな愛〈戀〉慾（は）の實のなることは明かな物理[12]である。しかし、ここの花園では愛戀は（劇）毒藥（であった。／に等しかった。）であった。もしも戀慕が花に（混）交って花（咲）開くなら、やがてそのものは（、）花のやうに散るであらう。何ぜなら（□）、此の丘の空と（ゝ）花との明るさは、巷の戀に代った安らかさを病人に與へるため（だ。／であったから（。）に他ならない。／だ。）に他ならない。もしも彼らの間に戀の花が咲い（とし）た（ら）なら、（やがて）（□□）間もなく彼ら（の）を取り巻く花と空（が）との明るさ（が）はその綿々とした異曲のために曇るであらう。だが、（花と）此の空と花との美しき情趣の中で、華やかな（看護婦達の）女のさざめきが微笑のやうに迫るなら、愛〈戀〉慾に落ちないものは石であ（る。）った。此のためここの白い看護婦達は、（ゝ）患者の脈を（□／み／馬）驗べる〈巧妙〉妙巧な手つきと同様に、微笑と秋波を名優のやうに（捌）整〈頓〉頓し〈てゐ〉なければならなかった。しかし、彼女達といへども（□）一對の大きな乳（□）房をもって（ゐた。／る）ゐ（る娘であった。）た。病舍の燈火が一齊に消えて、彼女達の就寢の時間が來ると、彼女（は、）らはその嚴格な白い衣を脱ぎ（、）捨て、化粧をすませ（、身体に添った柔らかな線を／て柔らかな寢衣[13]／たしなやかな娘になった。）、腰に色づいた帶を巻きつけ、（しな）いつの間にかしなやかな寢（ゝ）巻姿の（しなや）娘になった。（しかし）だが娘になった彼女らは（、）、皆ことごとく（物憂げに黙ってゐた。）疲れと眠（み）〈む〉さのために物憂げに黙ってゐた。それは戀に破れた娘らがどことなく人目を憚る〈やうな〉あの靜かな惱ましさをたたへてゐ（た。／とと）るかのやうに。或るものは（祈）禱り）その日の祈りを（し、）するために跪き、或る（者）ものは手紙を（書／認め）書き、（あ）或るものは（ぼんやりと）物思ひに沈み込み、また、ときとして或る（者は）ものは（、）、盛裝をこらして火の消えた廊下の眞中にぼんやりと（佇んで）立ってゐた。恐らく彼（は／に）女（には）らには（、）その最も好む美しき衣物を着る時間が、（陽の輝いた間には）[8]眠るとき以外にはないの（であらう。／にちがひない。）であらう。

〔以下四行、「別れるとき、」まで原稿用紙貼付部分〕

或る夜、彼女らの一人は、夜更けてから愛する男の病室へ忍び込ん（だ。）で（彼女は出て來るとき、）副院長に）發見さ（せ）

れた。その翌日、彼女は病院から解雇さ（れた。）れた。（彼女は彼の妻（とは）を最も（親しい）愛した看護婦だった。別れるとき、」14 彼と一緒に見送った。）出て行くとき彼女は長い廊下を見送る看護婦達にとりまかれ（ながら／て歩きながら）ながら、いささかの羞づかしさのために顔を染めてはゐたものの、〈慨〉傲然とした（□）足つきで出ていった。（何か）それは丁度、長い使（□）酷と粗食との生活に対して反抗した模範を（、皆の方に）示（した）すかのやうに。その出て行くときの（□）彼女の禮節を無視した様子には、確に、「長らく彼女を虐めた病人と病院とに復讐したかのやうな快感が、悠々と彼女の肩に現はれてゐた。

〔章番号の下、原稿用紙欄外に「アキ」の指示〕

六

（しかし、（病）病院自身の）梅雨期が近〈か〉づき出すと、ここの花園の心配は此の院内のことばかり（で）ではな（かった。）くなって來（始め）た。（下）麓の海（際の）村には、その村全体の生活を（さ）支へて（行）ゐる大きな漁場が（あった。）ひかへてゐた。上に肺病院を頂いた漁場の魚の賣れ行きは（、）擴大するより、縮少するのが、より確實な運命にちがひない。麓の（生き）活躍した（人間）心臓を壓迫するか、頂の死に逝く（人間を）肺臓を黙殺するか、此の二つの背反に波打って村は二派に分れてゐた。（既に）既に（、譬へ）決定せられたが（やうに）やうに、譬へ此の頂きに（此の）療院が（あ（ると）った）としても）許されたとしても、（それは全時に、村の）（そは）それは全時に盡くの嬶の心臓が恐怖を忘れた（以所）故ではなかった。」15（い。／かった。）

〔原稿用紙上部欄外に「改行」の指示〕

（□／此れらの）間もなく、これらの腐敗した肺臓を恐れる心臓は、（間もなく）（此）頂の花園を苦しめ出した。彼らは花園に（近い）接近した地点に腐った肺臓のために賣れ残った腐った魚の肥料を積み上げた。蠅は群生して花壇や病舎の中を）接近した地点（に）を撰（んで）ぶと、その腐敗した肺臓のために（、）賣れ残って腐り出しただけの魚（の）の山を、肥料として積み上げた。忽ち蠅は群生して花壇や病舎の中を飛び廻った。病舎では、一疋の蠅は一挺のピストル（と）に等しく恐怖すべき敵であった。院内の窓と云ふ窓には盡く金網が張られ出した。金槌の音は三日（の）間（妻）患者達の安靜を防害した。一日の混乱は半ヶ月の靜養を破壞（する）〈した。〉する。患者達の体温表は狂ひ出した。

〔原稿用紙上部欄外に「改行」の指示〕

しかし、此の（甘）肺臓と心臓との戰ひはまだ續いた。既に金網をもって防戰されたことを知った心臓は、風上から麥藁を燻べ（出した）て肺（腐）臓（を）めがけて吹き流した。煙は（終日花壇の上に）道徳に從ふよりも、風に從ふ。花壇の花は終日〈燦〉濛々として曇って來た。煙は花壇の上から蠅を追ひ散らし

た（功／功勢）勢力より」[16] も、更に數倍の力をもって、直接腐った肺臓を攻撃した。（妻）患者達は（□）咳き始めた。（病舎の硝子戸は密閉され（た。）た。部屋には炭酸瓦斯が溜り出した。）彼らの一回の咳〈き〉は、一日の靜養を（天）掠奪（する）〈した〉する。病舎（の）は硝子戸（は）で金網の外から密閉された。部屋には（、）炭酸瓦斯が溜り出した。再び（、）体温表が乱れ（出し）て來た。患者の食慾が減り始めた。（しかし）人々はただぼんやりとして〈、〉硝子戸の中から（、）空を見上げてゐる（に）だけにすぎなかった。（しかし、風は常に同方向に吹）

〔以下五行、原稿用紙貼付部分〕

かうして、彼の妻は（の）その死期の前を、花園の人々に愛され（ながら）ただけ、眼下の漁場（の魚）に苦しめられた。しかし、花園は既にその（場を□）山上の優れた位地を占めた勝利のために、何事にも默ってゐなければならなかった。彼の妻は〈、〉日日一層激しく咳き續けた。

（て喜んだ）〔この削除箇所四文字、原稿用紙貼付以前に記載〕

〔章番号の下、原稿用紙欄外に「アキ」の指示〕

（五、）七

（しかし／かう云ふ）かう云ふ或る日、彼はこっそり副院長に別室〈呼びつけられた。

「お氣の毒ですが、多分、あなたの奥様は、（多分……。」）」

「分りました。」と彼は云った。

「此の月〈、〉いっぱいだらうと思ひますが……」

「ええ。」[17]

「私達は出來るだけのことをやったのです（けれど）が。……何分……」

「どうも、いろいろ御迷惑をおかけしまして、」

（「いや」）

「いや……それから、もし御親戚（□）の方々をお呼びなさいますなら、一時にどっと來られませんやうに。」

「承知しました。」

「長い間で〈、〉お疲れでございま（したで）せう。」

「いや。」

彼はいつの間にか〈、〉廊下の眞中まで來て（□）ひとり立（ってゐた。／ち停ってゐた。）ってゐた。忘れてゐた悲しみが、再び強烈な匂ひのやうに（匂）襲って來た。

（――周章てまいぞ。）

彼（の）は妻の病室の方へ歩き出した。

――しかし、これは、事實であらうか。

彼はまた立ち停った。セロの（セレナーデが）ガボットが（花）華やかに日光室（の）から聞えて來た。

――しかし、よし譬へ、明かに、事實は妻（の）を死の中へ引き摺り込まふとしてゐるとし」[18] ても、果して、事實は常に事實であらうか。

――嘘だ。と彼は（云）思った。

彼は、總ての自分の感覺（は）を錯覺だと考へた。一切の現象を假象だと考へた。

——何故にわれわれは、不幸を不幸（を）と感じなければならないのであらう。

——何故にわれわれは、葬禮を婚禮を感じては（なら）いけないのであらう。

彼はあまりに苦しみ過ぎた。彼はあまりに惡運を引き過ぎた。彼はあまりに悲しみ過ぎた。が故に、彼はそのもろもろの苦しみと悲しみとを〈、〉最中〈や〉僞りの事實としてみたくてならなかった。

——間もなく、妻は健康になるだらう。

——間もなく、二人は幸福になるだらう。

彼は（□）このときから、突如として新〈ら〉しい意志を創（っ）り出した。彼はその一個の意志で、總ゆる心の暗さを明るさに感覺しやうと努力し始めた。もう彼にとって、長い間の虚無は、一睡（の後）の（眠む氣）夢のやうに（なくなった。）吹き飛んだ。

彼は深い呼吸をすると、快活に妻のベッドの傍へ寄っていった。[19]

「おい、お前は死ぬことを考へてゐるんだらう。」

妻は彼を見て頷いた。

「だが、人間は死ぬものぢゃないんだ。死んだって、（しかし、）死ぬなんてことは、そんなことは何んでもない（んだ）。（しかし、人間は）分ったね。」——無論、何を云ってゐるのか彼にも分らなかった。

妻は冷膽な眼で彼を見詰めたまま默ってゐた。

「お前は俺よりも、そんなことは良く知ってゐるだらう。（人間（は）には喜びだけが本當なんだ。）死ぬなんて云ふことは、下らない、何んでもない、馬鹿馬鹿しいことなんだ（よ）。」

「あたし、もうこれ以上苦しむのは、いや。」と妻は云った。

「そりゃ、さうだ。苦しむなんて、馬鹿な話（さ。／ね）だ。（」）しかし、生きてゐるからって、お前は俺に氣がねする必要は、少しもない（よ。」）んだ。」

「あたし、あなたより、早く死ぬから、嬉しい（わ。」）の。」

と彼女は云った。（と彼は）

彼は笑ひ出した。

「お前も、うまいことを（□）〈云ひやがるな。〉考へたね。」

「あたしより、あなたの方が、可哀想（だわ。／ね。）だわ。」[20]

「そりや、定まってる（さ）。俺の方が馬鹿を見たさ。だいたい、人間が生きてゐるなんて云ふ（こ）ことからして、下らないよ。（」／何アんだ）、こんなにぶらぶらして、生きてゐたって、始まらないぢゃないか。お前も、もう死（ね。）ぬがいい、うむ？」

「うむ、」と妻は頷いた。

「俺だって、もう直ぐ死ぬ（のさ。）ん（だ）さ。こんな所に、ぐずぐず生きてなんか、ゐたかない（よ）。お前も、うまいことをし（やがった（。」）な？。／たものさ。／やがった。」）たもんさ。」

妻は彼を見てかすかに笑ひ（出した。／ながら）出した。

「あたし（ね）、ただ、もうちょっと、此の苦しさが少なければ、生きてゐても〈、〉いいんだけど。」（と妻は云った。）
「馬鹿な（ことを云ふな。）。生きてゐたって、仕様がないぢゃないか。いったい、これから、何を（□□）しやうって云ふんだ。もう俺もお前も〈、〉するだけのことは、すっかりして了った（。）ぢゃないか。（□）思ひ出して（□）みるがいい。」
「さうだわね。」と妻は云った。
「さう（だよ。）さ（□）。もう大きな顔をして、「死んでもいい」[21]よ。」
妻は（安らかに）彼の顔から彼の心理の變化を見届けやうとするやうに、默って（ゐた。）彼の顔を見詰めてゐた。
「（□□）お前は何だか淋しさうだ。お前のお母〈ア〉さんを、呼んでやらうか。」
「もういい。あなたが傍にゐて下されば、あたし〈、〉誰にも逢ひたかない。」と妻は云った。（「さうか）
「さうか、ぢゃ、」と彼は云っ（たまま黙って了った。）て〈、〉（彼は）直ぐ彼女の母に來るやうにと手紙を書いた。

〔章番号の下、原稿用紙欄外に「アキ」の指示〕

八

その翌日から〈、〉（急に）妻の顔は（水々しく）急に水々しい（水々）水蜜のやう（に）な爽〈や〉か（になって）さを加へて來た。妻は絶えず、窓いっぱいに傾斜して（咲いて）ゐる山腹の百合の花を眺めて（暮して）ゐた。彼は部屋の壁々に彼女の母の代りに新〈ら〉しい（シクラメン）花を差し（代／換）添へた。シクラメンと百合の花。ヘリオトロオプと矢車草。シネラリヤとヒアシンス。薔薇とマーガレットと雛罌粟と。
「お前の顔は、どうしてさう急に美しくなったのだらう。お前は十六の娘のやうだ。お前はいっぱいのスープも飲まないくせに、まるで鷄（を）の十五六羽もやっつけたやうな顔をしてゐる。不思議な奴だ。さては、俺の知らぬ間に、こっそりやったと」[22]見えるな。」
「あの百合の花を、此の部屋から出して（ほしい）。」と妻は云った。
百合の（花）匂ひは〈、〉他の花の匂ひを殺して了ふ。——
「さうだ、此の花は、英雄だ。」
彼は百合を攫むと（（音）廊下の方）部屋の外へ持ち出した。が、（自分の花の捨て場所は此の）さて捨てるとなると、（此）その濡れたやう（な花粉の）に生き生き（しさに／と）とした花粉の精悍な色のために（、）、（彼は迷（った）ひ出した。）捨て處がなくなった。彼は（廊下を）小猫を下げるやうに百合の花束をさげたまま、うろうろ廊下（の）を廻って空虚の看護婦（の）部屋（へ來）を覗いてみた。壁に狹まれた（廊下）柩のやうな（その）部屋の中には〈、〉しどけた帶や野蠻なかもじが蒸された空氣の中に轉げてゐた。（彼は百合の匂ひで、やがて）まもなくここで、疲れた身体を横たへるであらう（彼女達）看護婦達に、彼は山野の（生ま生）清烈な幻想を振り撒（くために）いてや

（り）るた（くなった）めに、そっと百（百を）合の花束を（そっと）匂ひ袋のやうに沈めておい（た。）て（ママ）戻って來た。」23

〔章番号の上下、原稿用紙欄外に「アキ」の指示。他、上部に「アキ」の指示削除〕

（六）九、

（彼は）山の上で（は）は、「また（或る日）或る日（ママ）拗く麥藁を焚き始めた。彼は暇をみて病室を出るとその火元の畠の方へ（行）いってみた。すると、青草の中で、（一人の若者が鎌）鎌を研（ぎながら）いでゐた若者が彼を仰いだ。

「その火は、」いつまで焚くんです？」（と彼は訊いた。）と彼は訊いた。

「これだけだ。」と若者は云ひながら（、）火のついた麥藁を（顎）鎌で（差した。）示した。

「その火は、焚かなくちゃ、いけないものですか。」

若者は黙って一握りの青草に刃をあてた。

「僕の家内は、此の煙りのために（死）、殺されるん（だ。）です。焚かないですませるものなら、やめてくれ給へ。」

彼は若者の答へを待たずに、裏山から（偏平な）漁場の方へ降りて（みた。）いった。偏平な漁場では、銅色の壯烈な太股が、林のやうに並んでゐた。彼らは（、）折からの鰹が着くと（、）飛沫を上げて海の中へ馳け込んだ。子供達は（、）砂濱で、ぶるぶる慄へる海月（の）を攫んで投げつけ合った。舟から樽が、太股が（、）、鮪と鯛と（鯖と）鰹（と）が（、）海の色に」24輝（いて）きながら潑溂と上って來た。（漁ヒ／忽ち）突如として漁場は、時ならぬ曉のやうに光り出した。毛の生えた太股は、（□）魚の波の中（で屈折した。）を右往左往に屈折した。鯛は（薔薇色の處女のやうに）太股に跨〈が〉られたまま薔薇色の女のやうに觀念し、鮪は計画を貯へた砲彈のやうに（沈着（、））、落ちつき拂（い）って並んでゐた。時々突っ立った太股の林（□□）が（破れ）搖らめくと、射し込んだ夕日が（、）、魚の（横腹で）波（の中／間）頭で（、）（□）鱗光（□）のやうな眼を射る）斬りつけた刃やうな鱗光を閃めかした。

彼は（丘）魚の中から（丘）丘の上（の花を）を仰いで見（上げ）た。丘の花壇は、魚の波（の中）間に忽然として浮き上っ（た）た。薔薇と鮪と芍藥と、鯛とマーガレット（と）の段階の上で、今しも日光室の多角な面が、夕日（を映して）に輝きながら鋭い光鋩を（放ってゐた）眼のやうに放ってゐた。

「しかし、（」と彼は考へた。）此の魚にとりまかれた肺病院は、此の魚（□と）の波に攻め續けられてゐる城である。（」）此の城の中で、最初に討死するのは、俺の家内だ。」と彼は（考へた。）思った。」25

（彼には）事實（、）彼にとって、眼前の魚（は彼の妻を攻める）果敢な無數の敵であった。）は、「（彼の妻を煙で苦しめた）煙で彼の妻の死を早め（つ）つつある無數の勇敢な（□）敵であった。と仝時に、彼女にとって（□）は、（と同時に彼女にとっては）魚は彼女の苦痛な時期を（、）より縮めんとしてゐる情〈け〉ある醫師でもあった。彼には、その砲彈のやう（に沈黙してゐる）な鮪の鈍重な羅烈（ママ）が、（どこかに意義ある（威嚇）靜けさ（を感

じて）保ちながら沈黙してゐるかの）急に無氣味な意（義）味を含（み）めながら、黒々と沈黙してゐるやうに見えてならなかった。（彼は、もと）

〔章番号の下、原稿用紙欄外に「アキ」の指示〕

（九）十

〔以下六行、原稿用紙貼付部分〕

此の（とき）日から、彼（に）は、彼の妻を苦しめてゐるものは〈、〉事實果して此の漁場の魚（であ）か花園の花々か、そのどちらであらうかと（云ふと／とが）迷ひ出した。何〈ぜ〉故なら〈、〉彼女が（もし）花園にゐる限り、彼女の苦しい日日は、恐らく魚の吐き出す煙が（□□）あるよりも、長く續いて行くにちがひなかったからである。

（見（て）ながら醫者に云った。）〔この削除箇所、原稿用紙貼付以前に記載〕

（九）（九）

その夜の回診のとき、彼の妻は自分の足を眺めながら醫師に訊ねた。

「先生、私の足、こんなに膨れて來て、（」）（どうしたん（で）で（ございませう。）どうしたんでございませう。」

「いや、それは何んでもありません。御心配なさいますな。何んでもありません（よ。）から。」と醫師は誤魔化した。

（水が足に廻って）——水が足に廻（って來た。）り出したのだ。

——もう、駄目だ。と彼は思った。

（彼は電燈）醫者が去ると、彼は電燈を消して燭臺に火を〈照〉點けた。

——さて、何の話をしたものであらう〈。〉[26]

彼は（默って妻の顔を見てゐる）妻の影が（蠟燭の光り）、〈リオトロオプの花の上で、蠟燭の光りのままに（花々が）細かく搖れ（る妻の影）てゐるのを眺めてゐた。（すると、）すると、ふと（、）」彼は初めて妻を見たときの、あの彼女のただ彼のみに赦され（た）てあるかのやうな健かな笑顔を思ひ出した。彼は涙がにじんで來た。彼はソッと妻の上〈へ〉に（□）かがみ込むと、花の匂ひの中で彼女の額（の上へ）に接吻した。

「お前は、俺があの（二）汚い二階の紙屑の中に坐ってゐる頃、毎夜こっそり（と）來て（□）くれた（ね）らう。」

妻は黙って頷いた。

「俺はあの頃が、一番面白かった。お前の明るいお下の頭が、あの（階段）梯子（を上った／を／から來る）を登った暗い穴の所へ、ひょっこり花車のやうに現はれる（□）のさ。すると、俺は、すっかり憂鬱がなくなっ（て了って）ちゃって、はしゃ（いで）ぎ廻った（が）も（のさ。）んだ。とにかく、あの頃は、俺も貧乏してゐたが、一番愉快だった（ね）。あれからは、俺もお前も、若い身空で苦勞をした。しかし、まア、いいさ。どっちも、わがままの云ひ合ひをして來たんだから（な）ね。それに〈へ〉俺だって、お前に一度もすまぬやうなこと〈は〉をして來てないし、お前も俺にあやまるやうな[27]ことは〈へ〉ち〈ょ〉っともなかったし、まア、俺達は、お互に有難がらなくちゃならない夫婦な

んだよ。何んだか、そろそろ〈お〉をかしな話になって來たが、とにかく、お前が病氣をしたお影で、俺ももう看護婦の免狀位〈ひ〉は貰へ（るし、）さうになって來たし、不幸と云ふことが〈へ〉すっかり分らなくなって來た（からね。）し、こんな有り難いことは（ない）〈へ〉さう（めった）矢鱈にあるも（んか）んぢゃない（よ）。お前も、ゆっくり寢てるがいい。（」）もう少しお前が良くなれば、俺はお前を負（って）んぶ（っ）して、（此）ここの花園の中を廻ってやるよ。」

「うむ」と妻は靜に（云った。）頷いた。

彼は危く涙が出さうにな（ったので）ると、（立って／やっと眉根）やっと眉根で受けとめたまま花壇の中へ（出て（行）いった。）降りて來た。彼は群がった（冷たい）夜の花の中へ顏を突き込んだ。すると、涙が溢れ出した。彼は泣きながら冷たい花を次〈ぎ〉から次〈ぎ〉へ（〈と嗅いでいった。）と虫のやうに嗅（いでいった。）ぎ廻った。彼は嗅ぎな（か）がら、激しい祈りを花の中でし始めた。

「神よ、彼女を救ひ給へ。神よ、彼女を救ひ」[28] 給へ。」

彼は（櫻草の）一握の櫻草（で）を引きむしって頰の涙を拭きとっ（て海を見）た。海は月出の前で秘めやかに白んでゐた。夜鴉が奇怪な（早さで影のやうに）カーブを描（カ）きながら、花壇の上を鋭い影のやうに飛（んでいった。）び去った。彼は心の鎭むまで、幾回となく、靜な噴水の周囲を（廻ってゐた。）悲しみのやうに廻（ってゐた。／り出した。）ってゐた。

（「神よ、彼女を救ひ給へ、神よ、彼女を救ひ給へ。」）

（その夜、彼は遲くまで妻の枕元に腰かけたまま黙ってゐた。）

（七／八）十一

その翌（日）朝早くから彼の妻の母が來た。彼女は娘の顏を見ると〈へ〉泣き始めた。

「君坊、どうした。まア、痩せて。もっと早く來やうと思ったんだけど、（」）いろいろ用事があって、」

（彼は）彼の妻は（「）いつものやうに冷〈膽〉淡な顏をして、相手の騷ぐ樣子を眺めてゐた。

「お（く）前、苦しいのかい。おっ母さんはね、」[29] 毎日お前のことば〈っ〉かり思って（。）たんだよ。早く來たくって來たくって、（□）しやうがなかったんだけど、皆家のものが病氣ばかりしてゐてね。」

彼は（妻の「）手（□）紙に書かなかった妻の、病狀を〈「〉もう母親に話す氣は起らなかった。彼は妻を母親に渡（して／すと）して〈を〉おいてひとり日光室へ來た。日光室のガラスの中では、朝の患者達が（竝んで／ガラスの中で）藤の寢椅子に横たはっ（て／たまま）て竝んでゐた。海は岬（の腕の中で）に抱かれたまま淑〈や〉かに澄んで（み）ゐた。二人の看護婦が（話し）笑ひながら（朝日に輝いた爽やかな花壇の中へ降りて行くと、）現はれると、滿面に朝日を受けて輝やいてゐる花壇の中へ降りていった。彼女（は）達の白い着物（が）は眞赤な雛罌粟の中へ蹲み込（むと）んだ。と、間もなく、轉げるやうな赤い笑聲が花の

中から起って來た。

（「まア、あんなに嬉しさうに。」と）彼の横（の）で寢てゐ（る）た若い女の患者も笑ひ出（ひ）した。

「まア、あんなに嬉しさうに。」

「ほ（と）んとにね。でも、もうあなたも、直ぐあそこをお歩きになれますわ。」と隣りの痩せた婦人が云った。[30]

「さうでございませうかし〈か〉ら。（「／さうだと、ほんとにいいですけど。」）でも、（まだ……）」

「ええ〈、〉。ええ、昨日も先生が、さう仰言ってゐられまし（たわ）てよ。」

「あたし、あの露のある芝生の上を、一度歩きたくって（歩きたくって）、しやうがありません（ね。）の。」

「さうでございますわね。でも、もう直ぐ、あんなにお笑ひになれますわ。」

看護婦達はまた花の中から現はれると、一枝づつ花を折った。（それから、）彼女達は矢車草の紫の花壇と（、）薔薇の（クリーム色の）花壇の（中）間を朗〈ら〉かに笑ひながら（縫れるやう）、朝日に絡（るやうに）って歩いていった。噴水は彼女達の行く手の芍藥の花（壇）の上で、朝の虹を平然と噴き上げてゐた。

十二

彼の妻の（注射の數は）腕に打たれる注射の數は、日（□□打）毎に増していった。彼女の食物は、水だけになって來た。

或る日の夕暮、彼は露臺（バルコオン）へ（□）昇（る）って暮れ（て）て行く下の海を見降ろし（た）ながら考へた。

——今は、ただ俺は（彼女／家内）、妻の死を待ってゐるだけ（だ）なのだ。その（間に）暇な時間の（間に）中へ、俺はいったい、何を詰[31]め込もうとしてゐる〈ん〉のだ〈ろ〉らう。

彼には何も分らなかった。ただ（彼を）彼は彼を乗せてゐる（露臺（バルコオン）の）動かぬ露臺（バルコオン）が、へ〈、〉（絶え／間断なく）絶えず時間の上（に乗って馳けてゐた。）で疾走しつつあるのを（彼は）感じた（。）にすぎなかった。

（——□□、一合間□に此の露臺の、どれだけの（時間）、速力を云ふのであらう。と彼は考へた。）

彼は（水□）水平線へ半（ば）円を沈めて（ゐる）行く太陽（を）の速力を見詰め（てゐた。／だした。）てゐた。

——あれが、妻の生命（いのち）（の）を擦り減（っ）らして（行く）ゐる速力だ、と彼は思った。

見る間に（眞赤に）、太陽（が）は（□□□□）ぶるぶる慄へながら水平線に食はれていった。海面は血を流した俎の（やうに、）やうに、眞赤な聲を潜めて（黙）（つ）靜まってゐた。（果實を積んだ車が坂道を登って來た。）その上で、（□）舟は（動かぬ）落された鳥のやう（であった。）に動かなかった。

彼は（急に）不意に（妻／胸の）空氣の中から、黒い（凶徴）□□を□）音のやう（に）な凶徴を感じ出した。彼は急いでバルコオン（へ／を／から）を降りていった。向ふの廊下から妻の母が急いで[32]來た。二人は顔も動かさずに黙って両方へ擦れ違った。

「あのう、ちょっと、」と母は呼（んだ。）びとめた。
彼は振り向いて黙ってゐた。
「今夜は、キーボ、危いわね。」
「危い。」と彼は云った。
二人は（暫く）そのまま〈何も云はずに、〉筒のやうな廊下の眞中に立ち停ってゐた。（彼は）暫くして彼は病室の方へ歩き出した。すると、附添ひの看護婦がまた近〈か〉寄って來（た）て。（また）彼を呼びとめた。
「あのう、今夜は〈、〉どうかと思ひますの。」
（「うむ、」と）「うむ」と彼は（云った。／黙って）頷いた。
彼は病室のドアーを開け（た。）ると妻の傍へ腰を降ろし（た。／て黙ってゐた。）た。大きく開かれた妻の眼は、「（大きく開（て）かれてゆくと、）深い水のやうに彼を見（ていた。）詰めたまま黙ってゐた。
「もう直ぐ、だんだんお前も良くなるよ。」と彼は云った。
（「うむ、」と（彼女）妻は頷いた。）妻は、（もう）今はもう顔色に何の返事も浮べなかった。
「お前は疲れてゐるらしいね。ちょっと、一眠りしたらどうだ。」[33]
「あたし、さっき、あなたを呼んだの。」と妻は云った。
「ああ、あれ（が）は。（□）お前だったのか。俺は、（□）バルコオン（で、何んだか）で、へんに胸が（□）おかしくなった。」
「あなた、あ（な）たしの身体を（上）、ち（っ）ょっと上へ持ち上げて。何んだか、谷の底へ、」落ちていくやうな氣がするの。」
（彼は輕い妻の身体を抱いて）彼は両手の上へ（輕い花束のやうな妻を）妻を乘せ（て動かせた。）た。
「お前を抱いてや（った）るのも、（暫くぶ）久し振りだ。（まアお前は）そら、いいか。」（まアお前は、）
彼は枕を上へ上げてから妻を靜かに（母）枕の（上）方へ（引き上）持ち上げた。
「何んと、お前は輕い奴だ（らう）らう。まるで、こりゃ花束だ。」
すると〈、〉妻は、（搖れるや）嬉しさに搖れるやうな微笑を浮べて彼に云った。
「（これで、もういい、）あたし、あなたに、」抱いてもらったのね。もうこれで、（いいわ。）あたし、安心だわ、」
「俺も〈、〉これで安心した。（」）さァ、もう眠るといい。お前は夕べから、ちっとも眠ってゐない」[34] ぢゃないか。」（いい加減に疲れただらう。」）
「あたし、（ちっと）どうしても眠れないの。あたし、今日は苦しくなければ、うんと〈、〉お饒舌したいんだけど。」
「いや、もう黙ってゐるがいい。俺はここ（で）についてゐてやる（から（」）さア、眠れ。」）から、眼だけでも瞑ってゐれば、休まるだらう。」
「ぢゃ、あたし、暫く眠ってみるわ。あなた、そこにゐて（ね。）頂戴。」
「うむ」と彼は云った。
（「注射の時間が來たら、起して／妻は眼を瞑（って）ると休（み

出した。）むやうな顔をした。

（しかし、その夜、（再び）彼女は（もう駄目だった）再び眼を開（く）と）いたときひどく苦し（み出した）んだ。（もう）しかし、もうリンゲルも（カンフルも）食塩も、勿論、カンフルも何の効き目（が）もなかった。ただ酸素吸入だけが、最後の泡を立てて、彼女の枕元で死と戦ってゐた。）

（「あなた、どこにゐるの、あたし、もう眼が見えなくなった。」と妻は云った。）[35]

妻（は）が眼を（□）閉じ（た。）ると、彼は（□）明りを消して窓を開けた。（木）樹の揺れる音が風のやうに聞えて來た。月のない暗い（□）花園の中を一人の年とった看護婦が憂鬱に歩いてゐた。彼は身も心も萎れてゐた。妻の母はベランダの窓硝子に頬をあて（た）て立ったまま、花園の中をぼんやりと眺めてゐた。（——）もう何の成算も消え失せて了ったやうに。（時々花壇の花の先端が、闇の中を探（り）る無數の（白い）青ざめた手のやうに揺らめいた。）遠くの病舎のカーテン（に）の上で、動かぬ影が（□彼のやうに）萎れてゐた。時々花壇の花の先端が、闇の中を探る無數の青ざめた手のやうに揺らめいた。

〔章番号の上下、原稿用紙欄外に「アキ」の指示〕

十三

その夜、満潮になると、彼の妻は（眼を醒すと）激しく苦し（んだ。）み出した。醫者が來た。カンフルと食塩とリンゲルが交代に彼女の体内に火を〈黙〉點けた。しかし、もう、彼女（の身）は昨日の彼女（ではなかった。／に（な）戻ら）のやうにはならなかった。（最後に）ただ最後に（、）酸素吸入器だけが、彼女の枕元で、ぶくぶく泡を立てながら（、）必死の活（□）動をし始めた。」[36]

彼は（彼）妻の上へ蔽ひ冠さるやうにして、吸入器の口を妻の口の上へあ（あ）てゐた。——逃がしはせぬぞ、と（、）云ふかのやうに。妻の母は娘の苦しむ一息ごとに、顔を顰めて一緒に息を吐き出した。彼は時々、吸入器の口を（引）妻の口の上から脱してみた。すると〈、〉彼女は絶えだえな呼吸（になって）を（して）苦しんだ。

——いよいよだ。と彼は思った。

（だが、）もし吸入が永久に（救）救される）妻の苦痛を救ふものなら（ば）、彼は永久にその口を持ち續けてゐ（ても良い）たかった。だが、（□□□）此の（□□）眼前の事實のやうに、吸入がただ彼女の苦しみを續け（させ）るためばかりに役立つ（なら）てゐる（ものならば）のだと思ふと、（□□）彼は（人の）彼女の生命を引きとめ（る（科□）醫師よりも、）やうとしてゐる藥材よりも、（人の□□斬り□す刃の方（が）を彼は選んだに違ゐなかった。）（今は彼は）今は、彼女の生命を縮めた漁場の魚に、〈初〉始めて好意を持（つべ（き）きであった。／たねばならなかった。）ちたくなった。しかし、醫（者）師は、（冷然として）法醫學に從って、冷然としてなほ一本の注射を打（た）たうと云ひ（出し）始めた。ただ、（今は）生き殘ってゐるもののためのみに。（しかし、彼も注射を打ちたかった。）

「いや、いや、」と彼の妻は（彼より前に云った。）彼より先に醫師の言葉を遮った。(9)

「よしよし、ぢゃ、もう打（たない。）つのは（□）止さう。」[37]

「あなた、もうあたし、駄目な（のかしら）んだから。」と妻は云った。

「いや、まだ（だ。）、まだ、」（大丈夫だ。）

「あたし、苦しい。」

「うむ、もう直ぐ、癒る。（□）大丈夫だ。」

「どうして、あたしを、死なしてくれないんだらう。」（と妻は云った。）

「（大丈夫だよ。）そんなことは、云ふもんぢゃない。」

「こんなに苦〈し〉んいのに、まだあたし（□）を、苦しめる（のかしら。）つもりかしら。」

今は、彼には彼女の死を希ふ意志が怨めしかった。

「もうちょっとの辛抱さ。直き苦しくなくなるよ。」

「あ、もう、あなたの顔が、見えなくなった。」と妻は云った。

彼は暴風のやうに眼がくらんだ。（彼（□）女）妻は部屋の中を見廻しながら、彼の方へ手を出した。（彼は暴風のやうに眼がくらんだ。）彼は、激しい愛情を、彼女の一本の手の中に殺到させた。

「しっかりしろ。ここ（だ、／だ、）にゐるぞ。」

「うん。」と彼女は（云っ）答へた。

彼女の把握力が、生涯の力を籠めて、「彼の手」[38]（に）の中へ入り込んで來た。

「あなた、あたし、もう死んでよ。」と妻は云った。

「もうちょっと、待てないか。」と彼は云った。

「あたし、苦しいの。あなたより、さきに死んで、濟まないわね。」

彼は答への代りに、聲を上げて泣き出した。

「あなた、長い間、ほんとに、「濟まなかったわ。御免してね。」（と妻は云った。）

「俺も、お前に、「長い間世話になって、すまなかった（な）。」

と彼は漸く云った。

（彼）妻は顎をひいてしっかりと頷いた。

「あたしほど、幸福なものは、なかったわ。あなたは、ひとりぼっちに、なるんだわね。あたしが、「死んだら、もうあなたのことを、「するものが、誰もゐなくなるんだわ。」

萎れたマーガレットの花の傍から、彼女の母の泣き聲が、「歡声のやうに起った。

「キーボ、キーボ、」（と母は叫んだ）

「お母さんにも〈へ〉すまなかったわね。堪忍してね。兄さんにも、「宜（敷）しく云って（頂戴）。それから」、[39]皆の人にも（「」）ね。宜敷しく云って、」）。」

「ああ、ああ、心配しないでいいよ、もう直ぐ〈へ〉皆の者が〈へ〉やって來るよ。」と母は云った。

「あたし、まだ、待たなくちゃ、ならないかしら。苦しいんだけど。」

「もう直ぐだよ。さっき、「電話をかけたんだからね、もう直ぐな

んだから。」

「あたし、さ（へ）きへ〈、〉死ぬわ。もう、苦しくって、」

「よしよし、安心してればいい。何も心配（すること）し。なくてもいい。」と彼は云った。

妻は頷くと眼を大きく開いたまま部屋の中を見廻した。一羽の鴉が、「彼と母との（泣き聲）啜り（上）泣く聲に交へて花園の上で啼き始めた。すると、彼の妻は、「親しげな愛撫の微笑を洩らしながら呟いた。

「まア、氣の早い、「鴉ね、もう啼いて。」

彼は、妻の、その天晴れ美事な心境に、「呆然として了った。彼はもう涙が出なかった。

「さやうなら、」と暫くして妻（が）は云った。」40

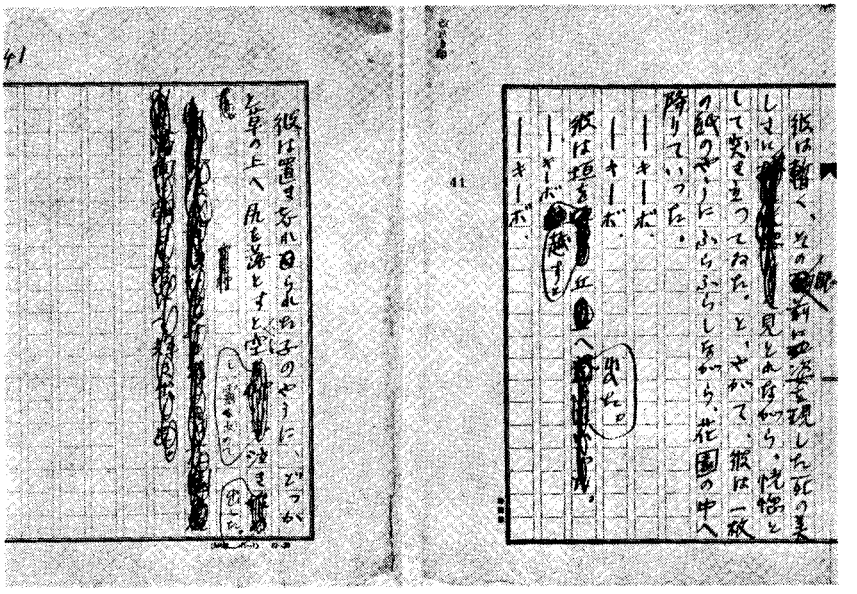
「うむ、さやうなら、」と彼は答へた。

「キーボ、キーボ、」と母は呼んだ。

しかし、彼女はもう答へなかった。彼女の呼吸は、ただ（二）大き（な）く吐き出（る）す息ばかりになって來た。彼女の把握力は、刻々落へとし〉ちていく顎の動きと一緒に、彼の掌の中で木のやうに弛んで來た。彼女は動きとまった。さうして、終に、死は、鮮麗な曙のやうに、忽然として彼女の面上に浮き上った。

——これだ。

彼は暫く、その（面）眼前に（E）姿を現はした死の美しさに、「（打た）恍惚として）見とれながら、恍惚として突き立ってゐた。と、やがて彼は一枚の紙のやうにふらふらしながら、花園の中へ降りていった。



——キーボ、
——キーボ、
彼は垣を（（垣）起すと）越すと丘（の上）へ（登っていった。）出た。
——キーボ
——キーボ、」41
彼は置き忘れ（た）られた子のやうに、どっかと草の上へ尻を落とすと、空（を仰いで）しい靈を求めて泣き（始めた。）〈出した。〉始めた。〔「空を仰」と記入された後削除〕
（朝日が彼の背後から昇り出した。花園の花々は満面に朝日を受けて輝きだした。）

注（1）「陽」に「ひ」とルビ
（2）「成」に「な」とルビ
（3）「顔横」に「プロフィール」とルビ
（4）「菌」に「きのこ」とルビ
（5）「數」に「かず」とルビ
（6）「者」に「もの」とルビ
（7）「交」に「まじ」とルビ
（8）「陽」に「ひ」とルビ
（9）「前」に「まえ」とルビ

【追記】
貴重な資料の掲載許可を賜った横光象三氏、数々の御教示をいただいた保昌正夫氏に、この場を借りて、こころより御礼申し上げる。
また、調査に便宜を供与された早稲田大学図書館に深謝申し上げる。

新刊紹介

栗坪良樹著
『横光利一論』

本書には、著者のあまたある横光論のうち、自ら主宰する研究同人誌『評言と構想』に発表した論考のみが収録されている。「上海」「機械」「寝園」などの代表作を中心に、精緻な読解を展開し、作品相互の関係に視線を投じながら、横光的主題を解明していく。作品との真摯な対話のなかから浮び上がってくる問題意識にあくまで固執しながら、横光論を構築していくところに著者の魅力があり、そこに本書の特色がある。

『定本　横光利一全集』（河出書房新社）完結以後、研究が益々活気を帯び、多様化していく中で、著者がこれまで着実に解明してきた〈横光利一〉がまとめられ、開陳されたことの意味は極めて大きい。
（一九九〇・二　永田書房　四六判　三一七頁　二五〇〇円）

〔十重田裕一〕